



土浦高女の動員学徒

土浦高等女学校の生徒たちは、1944年7月から第一海軍航空廠へ動員されることになり、鉢巻きを締めモンペを穿いて、飛行機の部品作り・鋸打ち・鍵掛けなどの作業に従事した。(市川彰編『ふるさと想い出写真集土浦』より転載)

戦時下の女学生

栗栖(大竹)恵子さんは東京のお生まれ。女子聖学院在学中に東京大空襲に遭い、土浦高等女学校に転校し、第一海軍航空廠へ動員されている間に終戦を迎え、戦後、土浦高女・新制土浦二高・茨城大学を経て、教員の道に進まれました。

今号では、2018(平成30)年10月に、高21回松井泰寿・鴻巣茂が旧本館校長室で伺った、栗栖さんの小学校時代から終戦を迎えるまでのお話を紹介します。引用文中の【 】内は筆者による注記です。

戦時下の東京

1932(昭和7)年、東京府東京市王子区(現東京都北区)に生まれました。住まいは、武蔵野台地の北東端、赤羽と十条の間、中間くらいの所で、近くには陸軍の兵器・弾薬・資材の補給を行っていた東京陸軍兵器廠がありました。

父大竹貞吉は、土浦中学を1918(大正7)年に卒業した、中17回生です。慶応大学に進みましたが、写真の道に転じ、撮影所に勤務した後、宮内省の撮影技師となり、陛下【昭和天皇】の御真影をはじめ、両陛下や皇族方のお姿を撮影していました。戦後の1953(昭和28)年には写真集『ある日の天皇』を岡倉書房新社から刊行しています。

1938(昭和13)年4月、岩淵町立第三岩淵尋常小学校【戦後、北区立第三岩淵小学校と改称され、平成28年4月1日からは、清水小学校と統合され、西が丘小学校となる。】に入學しました。

初等科4年生の1941年12月8日午前7時、開戦のラジオ放送【大本営陸海軍部午前6時発表……帝国陸海軍部隊は本8日未明、西太平洋においてアメリカ・イギリス軍と戦闘状態に入り……】があり、登校して校庭で万歳三唱を唱えたのを覚えています。「勝った、勝った。」と大人たちは大喜びをしていたので、私もうきうきして家に帰ると、よく遊んでもらっていた近所のお兄さんが、中学校の国防色の制服・戦闘帽・ゲートル巻き姿で立っていて、「アメリカと戦争を始めたのだぞ。喜んでなどいられるか。」と叱られました。何の事かと訳が分かりませんでした。お兄さんは当時の日本の状況やアメリカの事をよく分かっていたのだと思います。その後、連戦連勝の報道が続き、教室では世界地図にジャワ・シン

ガポールと次々に占領地をマークしていききました。

しかし【1942年6月のミッドウエー海戦の敗北以後】、戦局が不利になると、私たちの生活も逼迫してきました。既に【1941年4月1日から】配給制度が始まっており、主食の米は成人男子1人1日2合3勺【330g】と決められたのを皮切りに、副食・マッチ・木炭・衣料などの生活必需品も酒・煙草などの嗜好品も配給制となっていました。

戦局の悪化【1943年5月21日に山本五十六連合艦隊司令官が戦死し、5月30日にはアッツ島守備隊全滅が大本営から発表され、日本軍の玉砕が初めて国民に知らされるなどした。】とともに、税金も物価も上がり、物資不足はいよいよ酷くなってきました。配給制は一応守られてはいましたが、遅配がちとなり、米の代わりに芋などの代用食が増えてきました。副食の魚などは減多に手に入りませんでした【当時の「週刊朝日」には、特集「食べられるものいろいろ」が組まれ、ぎざ虫・孫太郎虫などが美味しいと推奨する記事が載っている】。そんな中、私を含めて子ども4人を抱えた両親が、どんなにか苦勞をしていたかと思うと頭が下がります【両親はその苦勞話をしたことはありません】。

1944年に入ると、あちこちで雑炊食堂が開かれました【1944年2月に、ビヤホール・百貨店・喫茶店・食堂などの飲食店が政府により指定され、開店した。東京都内では4月末現在335軒。1日の米の配給量が2食分に減っていたので、1人1杯20銭で、事前に入手しなければならぬ食券が不要の食堂は大人気となった。店によっては汁ばかりの所もあり、井に箸を立てて倒れなければ合格、倒れたら不合格との品定めもされていた】。今なら捨てるような食材をどろどろに煮込んだ雑炊でしたが、食堂の前には長蛇の列ができていました。家族の食事を確保

するために、鍋を持ってその行列に並ぶのが、私の役目になっていました。酒の仕込み樽のような円筒の鍋から大きな柄杓で、持参した鍋に入れてもらった雑炊は、ほんの少々のおかず米に、大根の葉や芋のつる、皮の付いたままのじゃがいものかけらなどを、鯨の皮或いは蜆・田螺などの剥き身を出汁にして、代用醤油で煮込んだ物でした。薄いお粥のように啜れる物で、一時は満腹感を感じましたが、直ぐにお腹が空いてしまいました。栄養価が低い物を水分と熱で誤魔化しているわけです。当然のことだったと思います。



雑炊食堂

政府公認の雑炊食堂には長蛇の列ができていた。しかし、食糧事情が逼迫し、雑炊食堂への配給も滞るようになると同時に、空襲が激しくなり、行列に並ぶどころではなくなってきた。

女子聖学院入学

1944年3月、父の薦めで滝野川にあった私立女子聖学院を受験しました。父は、1929(昭和4)年に宮内省から派遣されて渡米し、ハリウッドにあったチャップリンの撮影所で撮影の勉強をしていたので、その影響もあったのでしよう。

女子聖学院は、アメリカプロテスタント教会の婦人宣教師バーサ・F・クロソンによって、1905明治38年に創立され

たミツシヨンスクールです。当時の入試には学科試験はなく、内申書・身体検査・体力テストと口頭試問による人物考査とで実施されてきました。父は、体力テストの「懸垂」に備え、自宅の庭に高い鉄棒を造ってくれました。教育パパで、子煩悩な父であったと思います。

口頭試問では、神武天皇の即位の絵を見せられて、「何の絵ですか。」と聞かれました。見たことがある絵だったので、「神武天皇の即位の絵です。」と答えると、更に、「なぜ分かりましたか。」と問われました。「教科書で見たことがあります。」と答えましたが、試験官の先生は、「三種の神器が描かれているからですよ。」と答を明かし、私の答が間違いであることを優しく教えてくれました。更に、「青少年学徒二賜ハリタル勅語」について質問されましたが、「教育勅語」について聞かれるだろうと思っていたので、しどろもどろの答になってしまいました。

女子聖学院の入試では、絵を見せて感想を求める問題が出る、と近所の人から聞かされていました。しかし、思いがけない絵を見せられたので、びっくりしました。今思えば、ミツシヨンスクールも軍国主義の波に押し流されていたのだと思います。軍や政府の方針に逆らえば、その存続さえ危うかったのでしょうか。あのような問題で入試をせねばならなかった先生方は、さぞ辛い思いをしていたのだと思います。学院には外国人の生徒も何人か籍していました。が、いつの間にか登校しなくなりました。

東京大空襲

1944年7月9日にはサイパン島が陥落し、本土空襲が現実のものになってきました。そのため、8月4日からは東京都の児童集団疎開が始まり、初等科6年の

弟(栄一・高4回)と3年の妹(義子・土浦二高昭和29年卒業)は、群馬県の伊香保温温泉木暮旅館【現ホテル木暮】に疎開しました。当初、父は、心配をして妹は家に残しましたが、弟を送って行った際に疎開先の様子を見て、東京よりは安全だと判断したのでしよう、何日か後に、父に連れられて妹も疎開先に行っていました。小学校入学前の一番下の妹(常子・土浦二高32年卒業)は、土浦の伯父(大竹正之介。1913年卒業・中12回。高田保や下村千秋と同級)に預かってもらいました。家族が、東京・伊香保・土浦と離れ離れになりました。

年末になると、空襲の被害に遭う同級生が出てきました【アメリカ陸軍航空軍の日本本土空襲は、マリアナ諸島に基地が完成した1944年11月から本格化した】。最初は被害生徒の家にお見舞いに伺ったりしていましたが、空襲が頻繁になると、もうそれどころではなくなりました。空襲警報が鳴ると、帰宅させられました。ある日、下校途中の王子飛鳥山で防空壕に逃げ込もうとしましたが、そこは近所の人でいっぱいでした。そのため、防空頭巾の中から空を見上げながら夢中で走り、自宅の防空壕に避難しました。5kmくらいは走ったと思います。

連日のように大本営発表がありました【太平洋戦争中に846回】。初期には勇ましい「軍艦マーチ」が流れていましたが、そのうち「海行(うみゆ)かば水漬(みづ)く屍(かばね)、山行かば草生(くさむ)す屍【大伴家持の歌に信時潔が曲を付けた。】」と、悲しみを帯びた曲に変わり、撃滅した筈の鬼畜米英が本土空襲を始めたのです。しかし、物心が付いた時から、日本は神国だと教えられてきたわけですから、「神風が吹く。日本は負けない。」と信じ込んでいました。

1945年3月10日の東京大空襲は、自宅の防空壕から眺めていました。阿鼻叫喚の大惨事【江東区・墨田区・台東区に跨る40平方キロメートルの市街地は、完全に炎の海と化し、26万⁸³⁵⁸戸が焼失した。8万人以上(二説には10万人以上)が一夜にして焼殺され、100万人が家を失った。】となりましたが、日本軍のサーチライトに照らされたB29の機影や真っ赤に染められた夜空を何の感覚もなく眺めていました。打ち続く空襲に神経も麻痺していたのだと思います。

土浦へ疎開、そして終戦

数日後、伯父が土浦から迎えに来たので、土浦に移りました。3月9日に下校した際に、机の中に置いてきた聖書と賛美歌の本(毎朝朝礼で聖書を読み、賛美歌を歌っていた。)を取りに戻れず、そのままになってしまったのが、今でも残念でなりません。

伯父は、土浦小学校近くの田宿町【現大手町】で、「登利文商店」という小間物屋を営んでおり、既に疎開していた妹と一緒に世話になりました。妹は独りで寂しい思いをしていたのでしよう、本当に喜んでくれました。暫くすると、母も疎開して来たので、親子3人で、田宿町の華藏院【お不動様。沼尻墨遷の墓もある。】の近くに間借りをしました(その後、八坂神社裏の家の2階を間借りし、終戦時には亀城タクシー裏にあった6畳2間、風呂・台所付きの借家に移った。)

4月には土浦高女の2年生に編入になりました。30名近くの転入生が、裁縫室に集められていましたが、不安そうな面持ちで顔を見合わせていました。土浦高女も授業どころではなく、農家に勤労奉仕に出掛けたりしているうちに、5月には、2年生全員が航空廠に動員となりました。支給された黄土色の作業服を

着用し、土高女マークの付いた白鉢巻をして入廠しました。航空廠までは徒歩で通いましたが、戦局が逼迫して、養成班での基礎訓練どころではなく、直ぐに現場に配属され、工員さんの号令に合わせて、ハンマーで金属板を曲げる作業を繰り返しました。航空廠も度々空襲を受けましたが、体が疲れている上に、走るのが苦手だった私は、防空壕まで行けずに、工場内の作業台の下に身を隠していました。

6月10日に予科練と日立が空襲を、7月17日に日立が艦砲射撃を、8月2日には水戸が空襲を受けました。8月6日に広島に原爆が落とされると、「新型爆弾が落とされた。」との放送が何回もラジオから流れてきて、とても不安になりました。更に、「日曜に日立、水曜に水戸が空襲を受けたから、土浦は土曜日だ。」とのデマが流れ、大勢の市民が、夜になると避難をするようになりました。私たちも、都和小学校まで避難したのを覚えています。

8月15日からは、土浦小学校西校舎(現土浦一中)が学校工場となり、そこへ通うことになりました。同級生たちと工場が近くになって楽になったね。」と話しながら西校舎に着くと、「本日正午に重大放送があるから、帰宅して放送を拝聴するように。その後、連絡があるまで自宅で待機するように。」との貼り紙がしてありました。玉音放送は自宅で聴きました。「やっぱり負けた。戦争が終わった。」と感じました。父母と私と下の妹は生きている(伊香保に疎開していた弟・妹の安否は不明だった。)、土浦は残った、これからはゆっくり眠れる、とホッとした一方、言いようのない不安でいっぱいでした。